

東京バッハ合唱団 月報

[第 727 号] 2023 年 1 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101
Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604
Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.727

January 2023

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

＜紹介、新年への標(しるべ)として＞

宮田光雄 [著] 『良き力に不思議に守られて』 講演・説教・論考

小海 基 (団員、荻窪教会牧師)

新年おめでとうございます。昨年は東京バッハ合唱団創立 60 周年の年でした。私が当合唱団に参加したのが 50 周年の時でしたので、10 年たったこととなります。「残る人生、どうせ歌うのならとにかくバッハを歌いたい。今歌い始めなければ、歌わないで人生を終わらせてしまっても良いのだろうか？」と、10 年前に決断したことを思い起こします。この 3 年間で新型コロナのために思うような発表の機会が限られてしまったとしても、あの時決断して本当に良かったと思います。

年頭に皆さんにご紹介したい 1 冊があります。副題に「講演・説教・論考」とありますように、長年東北大学で教鞭を取り、政治学界を牽引し続けてきた著者宮田光雄先生（本合唱団を支援してくださっている団友の一人。本年 95 歳を迎えられる！）が、これまでの単行本に未収録のものをまとめた本です。ずいぶん前に定年退官され、ライフワークとしていらっしゃった、ご自宅を開放しての学生寮「一麦学寮」も閉じられ、最近では、著者はよほどのことがないかぎり講演、説教を引き受けることはありませんでした。本当に語りたこと、書かなければならないことだけに絞って取り組まれたのだなど、読者にも伝わってくる 7 つの文章がここに収められています。

著者の専門が第 2 次世界大戦以降のドイツ、ヨーロッパを主とした思想史・政治学であり、その分野での大家であるということも（本書内容にその教養の深みが反映しているのはもちろんなのですが……）いっさい超えて、一人のキリスト者、一人の同時代人として、楽しみながらこれらの説教を語り、書かれたことが伝わってきます。著者は、過去の蓄積、業績か

ら驚くほど自由にされ、「後ろのものを忘れ」て、「ほんとうに私たちが頼りにしうるのはキリストのみであることを信じ」、……「キリストによって設定された神による肯定という大前提、未来の約束を固く信ずる」……「〈時のあいだ〉を確固として歩む旅人」(120～121 頁)の一人として、これからの世代に向かって、明るく励ましのメッセージを語っています。

私のようにまだ現役牧師を続けている者としては、人生の最後の季節に、本当に語りた、書き残しておかねばならないという思いを向ける場所として、著者が「説教」というジャンルを選ばれていることに改めて驚かされ、ある種の感銘を覚えずにおれません。すべての説教のテーマが〈天に目を上げて〉、〈出発〉せよという呼びかけなのです。歌でバッハの伝える信仰の世界の深さに触れている皆さんには、この説教集の言葉がどんなに魂を揺さぶる内容なのかかわかると思います。この呼びかけを歌うからこそ、これを伝えるからこそ、神がこの私に命や声を授けられた意味があったのだという世界が、ここにあるのです。

《出エジプト》——新しい出発

まず何より、巻頭に収められた 2003 年に東山荘の日本 Y M C A 同盟 100 周年で語られた、出エジプト記の全書を総括する講演説教です。本書のタイトルに深く関わる、実に気迫のこもった名説教です。これまで世界中でなされてきた出エジプト記の説教の中でもとびきりの物だと、深く感銘を受けました。

(もちろんこの一節「良き力に不思議に守られて」は、「7 月 20 日事件」と呼ばれるヒトラー暗殺計画に関係・参与したとされ、強制収容所で処刑された D・ボンヘッファー牧師の獄中詩から採られたもので、わが国の『讚美歌 21』469 にも収められています！ 同じ訳詞で別の明るいメロディーでも、バプテスト連盟の『新選賛美歌』73 で歌うことができます)



■白鳥の郷(千葉県白井市)、撮影:千葉光雄

月報 2023 年 1 月号 CONTENTS

- ・ラジオ放送、聞きました(西村清志/須藤富美) p. 3
- ・追捕「東京バッハ合唱団」の誕生(大村恵美子) p. 4
- ・クリオラ・シングイン 2022 に参加して(高濱朗子) p. 5
- ・連載: 退屈するのはいそがしい [23](大野博人) p. 6



■プラタナスの並木（新宿御苑）
撮影：千葉光雄

考えてみれば、出エジプトのリーダー・モーセがイスラエルの民に向かって「ヨルダン川を越えて行け」と、〈出発〉を呼びかける説教をしたのも最晩年でした。それまでは「自分は口が重い者」とモーセは繰り返し逃げ回っていたことも思い起こします。これは、神学者 K・バルトの遺稿となった講演原稿「出発・回心・信仰告白」（バルトは

その回心の部分、途中まで書いて未完となってしまった）に書かれている、「教会史とは……《新しい出発》の綿々たる歴史」、「《新しい出発》の原型こそ出エジプト」という箇所に強く触発を受けて語られた説教なのです。モーセより 650 年も後代の預言者アモスが出エジプトを生々しく〈同時代的〉に受け止めたように、「荒野のような時代の只中で〈天に目を上げて〉困難な状況を〈突破〉していかなければならない」と、今〈出発〉を呼びかけるのです。

常に飢えと渇きに苛まされ、悪霊が住み試練に満ちた荒野、「神により頼むほかない」荒野に、神がパンとしてのマナを備え、水を用意されたように、私たちの荒野でも神は備えられているのだ、と語る著者の言葉にハッとさせられます。その「姿と形を変えたマナ」こそが、ボンヘッファーが歌っていた〈良き力あるもの〉、「私たちに新しい勇氣と力を与えてくれる心豊かな人との出会い」や「明快な言葉」（35 頁）、家族、婚約者、友人、音楽や思想の世界、祈り、聖書の言葉……（172 頁）であり、著者がいま取り組んでおられるボンヘッファー新全集版『倫理』新訳の言葉で言い換えれば、「日常的な・一見したところ小さな・ほとんど大した意味のないもろもろの言葉(Worte)、短文(Sätze)、目配せ(Winke)、助力(Hilfe)という形をとって」（174 頁）、目には見えない《いと高き世界》から来る「与えられる神の恵みの贈物いっさい」だということです。

それらに気づく時、荒野は全く姿を変えるというのです。「聖書によれば、荒野は神の現臨される場所でもあるのです」（24 頁）。「今日においてもまた、私たちは同じく命じられています。暗く見える未来の中へ勇敢に心静かに出発すべきである、と」。荒野に〈突破〉し、〈彷徨（さすら）〉うなかで神は私たちを「成長させ成熟」させ、「ひとたび死に、かつ甦るように育てられ」るのだと、著者は語ります。「荒野の時代に生き抜いていくために、〈いったい自分が何によって生きようとしているのか〉……ということを確認めねばなりません」（34～35 頁）。この説教はまさに創立 100 周年の節目の日に「的確な状況認識を持つ」、「状況に流され

ない信仰を堅持する」、「状況に切り込んでいく」の 3 点を青少年教育の使命として再確認した YMC A 関係者（11 頁）ばかりでなく、私たちを励ます生きた神の言葉、呼びかけです。

芸術作品、メルヘンとの自由な対話

プロテスタントに属する牧師として、著者の説教に対してうらやましく思うのは、著者がレンブラントの絵画（58 頁以下）やトーヴァルセンの彫刻（153 頁）、バーネット・ニューマンというユダヤ系現代抽象画家がカトリックの礼拝堂に掛けられている「十字架の道行き」の 14 枚の《留》に触発されて描いたという 14 枚の『ステーションズ』という連作や 2 枚の『在れ』と題された抽象画（158 頁以下）、またカトリック圏のオーバーアマガウの「メルヘンの家」のフレスコ画（126 頁以下）……と、実に自由に対話し、深くインスピレーションを得て、説教していることです。

さらには、カトリック組織神学者 O・H・ペッシュがメルヘンを用いて、組織神学的・教義的アプローチや聖書神学的《編集史的》方法をユーモラスにあてこすりながら、おおらかに《宣教》的に再話、再解釈することに開かれた（131 頁以下）著者の姿勢には驚かされました。あまりに頑な教条的に《聖書のみ》に固執し、〈メルヘン嫌い〉とまではいわずともそうした民間伝承を用いることなど夢にも思っていなかったという姿勢は、私も同じだったと認めざるを得ません。そこにも神が備え給う「良き力」が溢れていたのです。

著者はボンヘッファーの『説教全集』において、聖書のメッセージをメルヘンの言葉やメタファーが積極的に用いられていたという E・G・ヴェンデルの発見、評価を紹介します。そしてメルヘンに共通するテーマ、モチーフである「主人公たちは、きまって森の中で道に迷い、不安に陥り……しかし、やがて自分を鍛え上げ、賢さを身につけ、自分自身を発見するに至る」が信仰の秘儀を伝える説教にふさわしい〈此岸的〉、〈比喩的〉言語形式だとボンヘッファーはメルヘンを再発見しているという指摘（141～2 頁）にはハッとさせられます。メルヘンの主人公たちが〈外から〉の助け（ほかでもないルターの宗教改革的強調の言葉「エクストラ・ノス extra nos」）によって救われ、成長していくメルヘンのこのモチーフこそ、私たち人間の存在、実存が大いなる〈良き力に不思議に守られ〉、支えられ、受け止められているという感情を養っている（150 頁）というのには重要な指摘です。メルヘンはそれに耳を傾ける子どもたちが人生の暗い森の中で、試練に打ち勝ち成長していく冒険への〈出発〉の後押しをしているのです。本書で取り上げられているサマリヤの女とイエスの出会いもぶどう園の労働者のたとえも、盛大な晩餐会に招かれる解放の話も、皆このメルヘンと同じ明るいメッセージを響かせていることに、私たちは改めて出会わされるわけです。

今、バルト《否定の神学》の原点へ

もう一つ。著者が紹介する 1950 年代初めのプロテスタントの大神学者 K・バルトの逸話も実に面白かったです (154 頁以下)。それこそ、バルトのユーモアを早くから紹介し、晩年の講義まで直に聴講された著者だからこそ、捻りを効かせた紹介です。それは戦災で破壊されたバーゼル大聖堂のステンドグラスを新調達しようという動きに対して、バルトがモーセの十戒の第 2 戒「刻んだ像を造るな」を持ち出して、いかにも「カルヴァン主義的」に、「聖画像破壊イコノクラスム」的に反対意見を表明したことで、バーゼル市民の不評を買ったエピソードです。意外なことに著者はバルト側に立ちません。このバルトに対して、K・リュティ (バーゼルの名説教者にしてバルト主義者であった W・リュティの息子?) や K・マルティらの新しい世代が、そうした態度は、具象を否定し、乗り越える抽象表現の可能性の芽を摘んでしまわないかと批判したくんだりです (155 頁以下)。バルトがかつて『ローマ書』をもって宗教批判に打って出て、鋭く近代神学を批判したあの時の彼の《否定の神学》と、抽象芸術の世界はこんなにも深く通底しているのではないかという批判です。

サマリヤの女性に対して、サマリヤ人たちが神格化しているゲリジム山でも、ユダヤ人が中央聖所と崇めるエルサレム神殿でもない所で、「父を礼拝する時がくる」と実にやすやすとイエスは語られます。この世のランキングを全部ひっくり返して「気前よく」1 デナリオンを与えられる大盤振る舞いの神の恵みが語られます。盛大なる晩餐会が誰にでも「条件なし」に徹底的に開かれているのだとあつけらかんと宣言されています。

かつて聖書主義を掲げた時にはその《否定の神学》をもって「恵みのみ」を発見し、聖職者平信徒の序列ランキングを見事にひっくり返したはずの私たちプロテスタントだったはずなのに、今やかえってその伝統を振りかざして教条主義、原理主義に陥り、閉鎖の悪循環に陥る自家中毒を起こしかけている。そのことをプロテスタントが忌避してきた絵画芸術やメルヘンからもう一度学び直し、冒険へ出発し直そうと、著者があえてこのアプローチを選んで説教していることに心からアーメンと答えるたいものです。

(新教出版社、2022 年 10 月 30 日発行、1400 円)



■冬の富士 (河口湖)、撮影：千葉光雄

ラジオ放送、聞きました

「バッハのカンタータと 60 年」

11 月号でご案内しましたが、去る 10 月 23 日の NHK ラジオ第二放送「宗教の時間」で、主宰者・大村恵美子のインタビュー「バッハのカンタータと 60 年」が放送されました (8:30、再放送 30 日 18:30)。

お聞きになられた方が、さらにネット上のホームページをご覧になって、日本語演奏の《ロ短調ミサ曲》や《マタイ受難曲》、《ヨハネ受難曲》などの録音録画メディアをご注文くださいました。それも、北海道石狩市、福島県いわき市、四国の徳島市、宮崎県日向市……と、文字どおり全国、北から南までの反響に驚いています。

日本語演奏を、初めてお聴きになるはずの上記の方々、どんな反応をお示しになるか、非常に興味があります。ご感想をお寄せくださるとうれしいのですが――。

(上記のラジオ放送をお聴きになれなかった方、‘聴き逃しアプリ’などの聴取期限も過ぎたようですので、ご希望があれば CD にコピーしてお送りします。お申し込みください)

おたより

西村 清志 (後援会員・元団員、小樽市)

「バッハのカンタータと 60 年」拝聴しました。さりげなく謙虚に、淡々と語られる大村先生の口調にはたいへん懐かしさを覚えました。

日本のクラシックの音楽界では、歌詞は原語でうたうのが主流ですが、それには目もくれず、まったくブレずに「日本語でバッハ！」を貫いて来られた姿勢に心より敬意を表します。と同時に、こういった地道な活動によって、この国の文化の多様性が支えられているのではないかな、と思った次第です。

番組の中で先生が述べられた、日本が戦争をしなくなったことで可能になった長い人生 (卓見だと思えます) を、ますます楽しめることを (小生もその一人ですが……) お祈りしております。

須藤 富美 (後援会員・現団員、釧路市)

今朝、ラジオで先生のお話を聞かせていただきました。ありがとうございます。5 月の東京での公演 [第 121 回定期、杉並公会堂] に出演させていただきましたが、その後もお元気そうな先生のお声、とてもうれしく思っております。

12 月 3 日の演奏会 [クリオラ・シングイン、荻窪教会] にも参加させていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお祈りします。

これから寒くなりますので、温かいお料理を召しあがっていただければと思っております。

― 追補 ―

「東京バッハ合唱団」の誕生

NHK ラジオ放送「バッハのカンタータと 60 年」
(2022 年 10 月 23 日、第二放送) への追補

大村 恵美子 (主宰者)

今までに何人かの方々から、こう言われたことがあります。

「バッハのカンタータと言えば、最高級の西洋音楽の作品と聞いていたので、敬遠していたのに、あなたのコンサートに行ったら、内容がとてもよくわかるのでびっくりした……。それもそのはず、歌詞が日本語だったのです！」

ああ、こういうことを歌っているのか。音楽がすばらしいことは分かっても、ドイツ語が原曲なので、どんなことを歌っているのか、題名だけしか内容への取っかかりが無かったのに、今は全曲の内容そのものが、聴きながら即時に伝わるので、まずそれに驚いたんですよ——」

そうおっしゃって喜ばれる方が多いのです。このことを申しあげて、私の意図したことが伝えられたと、心より感謝いたします。

それではこれから、昔々、日本が世界中の交戦相手に、こてんこてんにやっつけられて、絶望的になってしまった、私の少女時代から発想されたものであることを、お断りしておきます。

◇敗戦のショック

1945 年、40 歳だった私の父が、満洲中央銀行勤務中に胃癌で死去したため、私たちは、日本国内に原爆を落とされて、交戦中だったアメリカに占拠される直前に、幸運にも全く無事な状態で、満洲から東京に帰国することが出来た。そして 8 月 15 日には、戦災に会わない東京郊外の吉祥寺の自宅で、終戦を静かに迎えることが出来た。

あとになって、外地から日本に帰国する人々が、大変な困難に直面し、本土に辿り着くまでに死亡してしまうケースも多く、恐ろしい体験だったことを知り、満洲の新京白菊小学校 2 年生だった同級生たち (シェークスピア邦訳の小田島雄志君もその一人)、どの位の人数の人たちが帰国できたのか気が気でなかった。でもすぐに連絡が取れて、殆ど全員に近い方々が何とか無事に母国に辿りつけたことを知って、狂喜した。

◇戦後日本の変わり様

原爆を 2 度も浴びての恐ろしい負け方なのに、日本の庶民はとにかく戦争が終わったことを喜んで、空爆の絶えた青空を見るだけにでも、心が開放されて、占領軍のマッカーサーを慕うようにさえなる人々もあった。屈辱という気持ちよりも、おくらしている日本の、西洋文化の取り入れに心は急いで、前向きとなって生活を整え、切り変え始めた。

◇J. S. バッハのカンタータとの出会い

アメリカ文化をとり入れようとする民生の中で、中学 3 年の私も、占領軍の啓蒙的な政策に乗って、あれこれの企画を模索してみるようになった。

そこで私の心を魅了したのが、LP レコードで J. S. バッハの音楽を聴かせてくれる、アメリカの企画の一つ、「バッハのカンタータを LP で聴いて見よう」だった。私もそこにかよって何度も聴くうち、自分でも不思議な位に、その音楽にはまり込んでしまった。言わば、どん底状態から急に息のたっぷりつける、至福の領域が拓けられた境地だった。

◇バッハのカンタータ―筋の戦後生活

それからは、もうバッハのカンタータ―筋の毎日で、レコード鑑賞のほかにも、図書館で本を借り続けて、知識としてもカンタータを追いまわして、少年期から青年期を過ごした。もう、その時代の物の不足や生活の不便などに不満をこぼすことも忘れ、バッハの暖かい世界に浸りきった。

◇生活そのものを内容とするバッハのカンタータ

その頃までには、学校の音楽教室に掲示されている写真の中で、(時代的にも)真先に掲げられている J. S. バッハに、尊敬から親愛の念が抱けるようになって来ていた。

◇「バッハ合唱団」の誕生

1962 年 7 月 1 日、音楽専攻を目指して芸大生となった私は、向こう見ずにも、ちらしを撒いて、「バッハのカンタータを歌いましょう」と呼びかけた。自宅に集ってくれた 20 人は、やはり何かを求めていた若者たち。私の気質として、組織を確立するよりも、みんなが集まって歌って、「たのしいね」と面白がってくれるのが第一。このように、ヤワな姿勢で「バッハ合唱団」(名称に“東京”を冠したのは、ようやく 1980 年代になってから)が生まれたのだった。

◇創立 60 周年も、週 2 回の合唱会合で心を充たす

初めの頃は、なるべく親しくなりたくて、私もいろいろ企画し、2 泊 3 日程度の旅行に出かけたり、ヨーロッパにも 5 回ほど演奏旅行を実施した。かなり活発な動きに、団員も喜んで乗ってくれて、いつの間にか 60 年にもなってしまった。

思い出も多いが、私は、ずっと目標の一つにする合唱団の皆さんと過ごしてきたことを、心より倖せに思いながら、いまだに安心して暮らしている。

[17]



■サザンカ (川口市安行)、撮影：千葉光雄

「クリオラ・シングイン 2022」に 参加させていただいて

高濱 朗子（後援会員・元団員）

今年もまたクリオラ・シングインに参加させていただき、ありがとうございました。

初の試みという昨年参加させていただいて、とても楽しかったことは記憶に残っていて、今回のお知らせを目にした時から、興味津々、参加させていただきたい気持ちでいっぱいだったのですが、日常の慌ただしさに追われたり、あきらめかけていたところに、ご近所に住む元団員の百鳥さんからお誘いメールをいただき、直前に二人で申し込みをして参加させていただけることになりました。

当日にバタバタと、どの楽譜を持って行くんだっけ？ オラトリオのどこを歌うんだっけ？ とりあえず全部両方持って行こうと赤い表紙の、第1～3部と第4～6部の楽譜をバッグに入れて荻窪教会に向かいました。

教会に到着すると、受付で懐かしい団員の皆さまの笑顔に迎えられて中へ。大盛況で、荻窪教会の礼拝堂は見たこともないほど、空いているスペースが見当たらない状態で、活気に満ちていてわくわくしました。たくさんの懐かしいお顔に出会えて喜びひとしおでした。荻窪教会の天井まで届きそうなパイプオルガンが神々しく輝いているのも、その場の雰囲気がいっそう盛り立てているように感じました。

全体のプログラム、クリオラ・シングインの進行が素晴らしかったと思います。最初に、松尾さんの作品《きらきら星変奏曲》の一部を聴かせていただけたことも嬉しく、美しいメロディー、オケの演奏と歌声が心に沁み、楽しませていただきました。

今回のシングインのメインは、《クリスマス・オラトリオ》第4部～第6部でしたが、先生のお心配りで、まず第1部の1曲目（冒頭合唱）を歌い、その後、第4～6部が、合唱とコーラル、団員の方の朗読によるエヴァンゲリウムで繋がれて進み、楽しい時間はあっという間に終わりました。

1部の冒頭合唱は、昨年のシングインから1年ぶり、第4～6部は（後で調べてわかったことには、2013年に杉並公会堂で歌って以来）9年ぶりに楽譜を開いて歌ったという大胆不敵さ！ それなのに、室田千晶さんの美声でのお上手な進行に沿って、そのページをパッと開けて歌いだすと、歌詞もメロディーも自分の身体に染み込んでいるのを感じ、嬉しく楽しくてたまりませんでした。声が出るところだけ歌うという、あまりに全体の音楽への貢献度が低いのは、ひたすら申し訳ない気持ちでいっぱいですが……。2、3箇所、お隣りの荒井さんと歌っている歌詞が違うような気がして、あら？ 私の楽譜から変更（進化）があったのかしら？ と思いつつも、ま、ドイツ語で歌うもあり、とあった

<終了報告>

クリオラ・シングイン 2022

■キラキラ星変奏曲

<主題と1+40の変奏のうち、Nos. 1-13, 43>

- ・作詞/作曲/指揮：松尾茂春（東京バツハ合唱団員）
- ・チェロ：椿 周 ・オルガン：田尻明葉
- ・合唱：東京バツハ合唱団

■クリスマス・オラトリオ BWV 248

<後半3部の合唱部分を中心に、シングイン形式で>

- ・管弦楽：ARS（コレギウム・アルモニア・スペリオーレ・ジャパン）有志
ヴァイオリン 井上薫子 / 戸ヶ崎真央
ヴィオラ 宮本征和、チェロ 椿 周、コントラバス 佐瀬祥平
トランペット 福島悠介 / 織田得郎 / 程内隆哉
ホルン 市原秀紀 / 吉岡茉祐子、フルート 高角健志
オーボエ 椿 高明 / 椿 奏重
[ティンパニ、今回は太鼓で代替 室田千晶（東京バツハ合唱団員）]
- ・オルガン：田尻明葉 ・訳詞/指揮：大村恵美子
- ・合唱：クリオラ・シングイン合唱団 2022（お集りの皆様）

<参加者> 計 74 名

- ・来客/外部参加者 32 名、東京バツハ合唱団 26 名 (S:7, A:8, T:5, B:6)、ARS メンバー 13 名、指揮/オルガン/録画、各 1 名
- <後援> 杉並区

のでたいしたことではないかと思ひ、気にせず歌わせていただきました。

大好きな《クリスマス・オラトリオ》を合唱団の皆さんの歌声にまぎれて歌わせていただけるといふこと、しかもオーケストラ付きで、というのは、私にとって本当に贅沢な至福のひとつ！ このような機会を設けてくださった大村先生の懐の深さと寛大さ、暖かく迎えてくださった合唱団の皆さまには感謝しかありません。心よりお礼申し上げます。

素敵な演奏をお聴かせいただいた管弦楽団ARSの皆さま、オルガンの田尻明葉さま、ありがとうございました。ティンパニの代わりに太鼓も素晴らしかったです！

40年以上前に初めてバツハ合唱団で歌わせていただいた《クリスマス・オラトリオ》。それ以来、おそらく毎年この時期にはCDで聴き、その間に何回か歌わせていただき、今またこのような素敵な企画に参加させていただける幸せをかみしめています。大村先生、団員の皆さまのご健康とご活躍をお祈りしつつ、来年5月の定期演奏会を聴かせていただくのを楽しみにしております。



■クリオラ・シングイン
2022
(荻窪教会, 2022/12/3
写真提供：パラビジョン)

確認の旅、発見の旅

安曇野閑人 大野 博人

人はどうして旅に出るのか。

出張なら目的ははっきりしている。でも、観光には何を求めているのだろう。

最近、ある観光地を訪れた。古い街並みが残る地方の小さな街。古民家や江戸時代の商店といった歴史的な建物がいねいに修復されている。たしかに、いにしへの面影がよみがえるようでもある。

でも、どこか変だ。

趣のある建物は軒並みカフェやレストラン、土産物店、民芸品店などになっている。あちこちの店先には、地方の名物の食べ物がずらり。コロナ禍が緩んできたせいか、そんな通りをそぞろ歩く観光客も少なくない。名物を食べ歩きしたり、スマホで写真や動画を撮ったり。

過ぎた時代をしのぶために訪れたはずが、歴史をコンセプトにしたテーマ・パークに来てしまったようだ。

「歴史」という言葉からだれもが思い浮かべる、いささかステレオタイプな光景はそこにある。けれど、歴史の痕跡はあるような、ないような……。

多くの人がガイドブックを手にししているか、スマホの旅行サイトを見ている。SNSで「インスタ映えする」と評判の場所に集まる。

しかし、それは、すでに情報としてひろく伝えられていることを「確認」しているにすぎない。自身の感性による「発見」とはちがう。

パリに暮し始めたころ、写真だけでなくビデオを撮る観光客も増えていった。その後さらにスマホが普及して、そこら中で写真や動画を撮るようになっていった。エッフェル塔でもシャンゼリゼでもルーブル美術館でも。ダビンチのモナリザの前もカメラをかまえる人で混み合っている。けれどみんなレンズ越し。自分の目で直接見ていない。

そこに発見はあるだろうか。

スマホどころか、カメラだってない時代、旅を心にとめようと思えば筆でスケッチをするか、文章にするか、音楽にするか。絵を描き、紀行文や詩を綴り、曲をつむぎながら、なにかを発見し、旅の体験は心の奥深くに入っていくだろう。

写真からビデオへ、さらにスマホへと記録するための道具が進化するにつれて、記録されるデータ量は飛躍的に増えていった。けれども、テープやディスクには収まったからといって、心に収められたことにはならない。何時間も動画を撮りためた人が、帰国してからそれを見なおすのだろうか。なにかを発見する契機になるのだろうか。

観光客は、すでにネットのどこかで目にした景色や

店を旅先で確認しようとし、観光地はそれに応えるためにテーマパーク化を進める。需要と供給はみごとに一致するけれど、繰り広げられるのは予定調和の旅だ。そこに、思いもよらない発見は期待しがたい。

旅での経験は、記録するための手段が限られていたときの方が深かったのかもしれない。見知らぬ土地で印象的な人や光景に出会ったとき、なぜ心を揺さぶられたか考えなければ絵も文章も曲もつくれない。そうやってなにかを発見する。自分で発見したことは忘れない。

ルーブルを歩きながら、たいていの人が通り過ぎるだけの絵になぜか引き留められたことがある。どうして、自分はこの絵に惹かれたのだろう。じっと見つめながら考え続けた。忘れがたい作品となった。たぶん、「ルーブルで見逃せない作品リスト」のような情報にしたがって、モナリザやミロのヴィーナスなどを確認し、その前で記念撮影するために広い館内を駆け足で回っていたら、そんな発見はなかっただろう。

ふり返ってみると、バッハの音楽を楽しむときも、名曲案内や名演奏紹介の本などに頼りすぎていたかもしれない。そこに書かれていることを確認するばかり。膨大な作品からなる広大な世界を旅するのに手がかりがないと迷子になりそうな気がしたからだ。でも、迷子にならないと発見もないのだろう。

新年は、カンタータの世界で迷子になってみようかな。

(団友・後援会員、元朝日新聞記者)



■最近、高校時代によく通った岐阜市の図書館の場所を「確認」しようと50年ぶりに訪れたら、きれいな公園になっていることを「発見」した。(写真・説明とも筆者)

[編集後記]

・12月号につづき、新年号も増ページでお送りします。ご寄稿くださった皆さま、ありがとうございます。今後、地球上のどこからでもお寄せ頂きたいものです。
・その地球ですが、いま何が起きているのでしょうか。この欄に「2022年2月24日から十日、またも人間の無力を知らされています」と書いてから10か月が経ちました。が、誰でもが無力だったわけではなさそうです。ひとりの人間の意志が、これほどにも強靱になることがあり得たのです。地球を滅ぼすほどの、プーチンの意志！